

都市における未来の戦争災害の社会的な予期

——ニューヨークの民間防衛を事例として——

筑波大学 木村豊

1 目的

本報告の目的は、予期される未来の戦争災害の社会的な側面を明らかにすることである。第一次世界大戦後、世界の主要な都市では未来の戦争災害に備える民間防衛体制が整備されてきた。そこで本報告では、ニューヨークの民間防衛を事例として、都市の中でいかに未来の戦争災害イメージがつくられ、それが都市の社会にどのような影響を及ぼしてきたのかについて検討することを目的とする。

2 方法

これまで、未来の戦争災害イメージについては、冷戦期のアメリカにおける核攻撃のイメージに関する歴史学的な研究が積み重ねられてきた。そしてそうした研究の中では、主としてアニメ映画「ダック・アンド・カバー」や巡回展「アラート・アメリカ」などのように、未来の核攻撃に備えるために国家によって進められた民間防衛政策における国民への啓発事業が分析の対象とされてきた。

しかしながら、未来の戦争災害イメージは、それよりも以前から、都市に生きる人びとの生活に影響を及ぼしてきたと考えられる。特に、第一次世界大戦後に世界の主要な都市で整備されてきた民間防衛体制の中では、未来の戦争災害イメージが具体的な都市の生活空間と結びつけられることで、それを基にした被災時の対策が立てられてきた。そしてその中では、都市を攻撃する技術の進展に伴って未来の戦争災害イメージが変容し、それに合わせて都市の民間防衛も作り替えられてきた。

そこで本研究では、ニューヨーク市の図書館・公文書館で調査を行い、第二次世界大戦期および冷戦期におけるニューヨークの民間防衛に関する各種資料（公文書・関係メモ・訓練記録・年次報告書・啓発パンフレットなど）を収集した。またそれと同時に、ニューヨーク市内でフィールドワークを行い、現在市内の公共空間の中に残されているシェルターなどの民間防衛の痕跡を観察した。

そうした調査で得られた資料に対して、本研究では、予期される未来の社会的な側面に注目しながら分析を進めた。特に、広島・長崎への原爆投下の後に W.F. オグバーンによって構想された未来を記述分析する社会学の枠組みとともに、近年記憶研究の中で提起されている未来研究の枠組みについて取り上げ、過去に予期された未来を記述分析する社会学の枠組みについて検討したうえで、それに基づきながらニューヨークの民間防衛の中で予期された未来の戦争災害イメージを分析した。

3 結果・結論

本研究では、ニューヨークの民間防衛の中で予期された未来の戦争災害イメージをめぐって、主に以下の3点が明らかとなった。第一に、ニューヨークの民間防衛体制は、第二次大戦期につくられたものを基盤として冷戦期にそれが再構成されるようにして整備されてきた。第二に、その中では広島・長崎への原爆投下などの情報がコントロールされながら未来の戦争災害イメージがつくられてきた。第三に、そうした未来の戦争災害イメージを基にして被災時の行動規範などがつくられてきた。

また本報告では、そのようなニューヨークの民間防衛に関する具体的な事例を検討するとともに、未来を記述分析するための社会的な研究枠組みについて考察したい。